

日本書紀傳 廿九卷五

和書
一〇五二二號

九十七

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (106)
函號	特 85 1

内一三六八三號



高倉庫

省印

圖書

南政庫

内二六八三號

御在^ひ一坐^{中洲}けり出雲國と本^{大和國}こいて次^{終めた}ふ諸國の全^ひ小及
 り者^ひあり猶^{中洲}此^{大和國}小漏^{終めた}たり二柱神の事跡あり諸國小
 多^ひめりを其ハ物^{中洲}より見當^{大和國}るに隨^{終めた}ふ書加^ひふ可^ひく又
 入^ひり聞^{中洲}ふ隨^{大和國}ひて補^{終めた}ひも爲^ひつ可^ひきを後人此意を得
 て知^ひるる限^{中洲}ハ政猶能明^{大和國}るめて書^{終めた}一絶^ひべきあり但
 各其一處^ひ小在^{中洲}てハ予^{大和國}が如^{終めた}く書典を頼^ひて明^ひる
 外無^ひきを此^{中洲}ハ各^{大和國}其生^{終めた}けたる國の事限^ひり小^{カと盡}尋^ひ探^ひりて
 む^ひハ後^{小此志}竟^{と絶て}小天下の事を明^{合する}るむ至^{人の出来}る可^{りて}くあり
 有^ひけりバ今^{小此}此^ハ其^{マトニ}嚆^{ヒメ}矢^小とてあり
 大八洲國の^ひあり^小萬國の全^ひをも作^ひり神^ハハ^ハ此^ニ柱^此
 けり御事^{あり}バ何^れの國^何れ^の地^と雖^も必^其御事

○日本書紀傳二十九

○百八十八

此字神武天皇已
年御紀小書け米
都久流訓せしむ
此小記小津人記
有以從ひて

跡の御在一坐り可き由無きと
思ひて懇到小尋明め奉り可きと
字小續けて都久理多麻比と訓べ一緒天下を經營一
給ふ御事小就て其次第ありむ有る事ありける此ハ伊
弉諾尊伊弉册尊二柱神小始り素戔嗚尊小整ひ此大
己貴命以彦名命小成り御大業小ありむ御在一坐け
る然るハ傳七五十九丁百一小注せらる如く此ハ洲起
元章第一一書小天神謂伊弉諾尊伊弉册尊曰有豐葦
原千五百秋瑞穗之地宜汝往循之と有る是即天下國
土を造立しせ御在一坐す大御政の始あり此御事古
事記小於是天神諸命以詔伊弉那那岐命伊弉那美命

修理固成是多陀用幣流之國賜天沼矛而言依賜也
見えたり國と生給可御事依り御
理固成と有り若て此大八洲國及山川草木の全と悉
小生成させ御在一坐て其天下を所知看す可き珍子
天照太神素戔嗚尊と生奉らせ給ひける小其後伊弉
册尊ハ一も故有て根國底國小渡らせ御在一坐けり
此小伊弉諾尊の追幸行一時の御言と古事記小載る
水たら小愛我那逆妹命吾與汝所作之國未作竟故可
還と有り此時ハ大八洲國ハ更あり謂ゆ蛭兒淡洲
の外蕃諸國と己小生竟させ給へり一御時ありけ

あり丹後風土記
國生大神の書一掃
吾風土記の國生大
神と有即此天神
かて渡と給御
事と思ふ可し者

わ其坐成^生給へる國土の上の山川原野を定め
顯見蒼生を安置^{ヲサメ}せ給はじ御儲小御在^ニ坐せ即
國形と作整へて給ふ御事小あり故四神出生
章第十^ニ一書小御言小對奉^ニせ給へる御言小吾與
汝已生國矣如何更求^ニ生乎と見えたる上の生國ハ即
字の如くして先小此大地を生成^ニ給へる御事あり
次ある求^ニ生乎ハ求^ニ作乎と書く一事あり即此大地を
經營^ニ給ふ御事を申とせ給へるあり
君見れば結の神が恨めし難面^ニ人^ニを何作りけむ
狭衣小甚若^ニも作置と聞えし結の神と恨
り^ニければ云しと有るど産靈神の御所爲小依て
人身の坐れ來る事と作し詠あり記傳^五卷小右

の修理齒成の義を説て此天神の御命ハ漂蕩へる潮
を固めて先國土を産べと基あり淡能基呂島を成し
り始て國土を産生て善ハ經營成^ニ固むと成し
係^ニ宣へりめて都久流と云ハ廣くして産給ふ事も
其中小存ありと云れた然り小天照大神ハ高天原を
るハ實小然り言あり此御事ハ置て此國土ハ素戔
所知者^ニの奉給へる此御事ハ置て此國土ハ素戔
鳴尊の專治とせ給ふ可し御事其第六一書小素戔鳴
尊者可以治^ニ天下也と有めて灼然と傳廿三^{二百五}
二百九^{十三丁}小徴^ニ奉りるが如く亦御名とハ東水臣津野
命と申奉りて謂ゆる國引坐神あり渡と給ひ又其
國引の御事小依て大地萬國と建とせ給へるを以て
建邦之神とも申奉りる御事あり故出雲風土記小云

く所以號意字者國引坐八束水臣津野命詔八雲立出
雲國者狹布之椎國在哉初國小所作故將作縫詔而云
こ之所見なる此初國小所作と有ハ二柱御祖神の初
て生成し給へり御事と語出させ御在し坐けり
て次小故將作縫詔とハ其地方の狹少あり就て他
の廣大あり地を取て作縫せ給ひむとの義ゆゑ如此
く天下の土地を増減し給ひて國形と整成させ給へ
り小依し打任せて國引坐神と申奉り御事あり即此
大地萬國小亘り御事業あり又欽明天皇御紀小建邦
之神二百九十八丁傳廿三二百九十八丁廿八十七小注せらるが如く

其百濟原夫建邦神者天地剖判之代草木言語之時
自天降來造立國家之神也と記させ給へり是れ著
明者あり己小此第一書小是時素戔嗚尊帥其子
五十猛神到於新羅國居曾尸茂梨之處乃興言曰此地
吾不欲居遂以埴土作舟乘之東渡と有ハ蕃國の始小
て未其地と造立させ給ふ可き御時ありり故小
先此大八洲國小渡りて御在し坐て此國と造り住せ
御在し坐りての御結構あり第五一書小素戔嗚尊曰
韓卿之島是有金銀若使吾兒所御之國不有浮寶者未
是佳略と詔給へり此國小御在し坐て外蕃の金銀

大須佐田小須佐
定給ハ朝御鏡
勅養々御鏡勅養
玉寶組之定給
百位と以て當者
有狀と想像り奉
可い者あり

と此小運輸し給ふ御事と議し給へり者あり
即外蕃の貢賦と此小御して皇大御國を豊饒小爲し
せ給ふとの御事ある可き事申すも更あり其新羅國
小天降り住せ給ふと雖も誰小地を借せ給ふとも無
く又金銀を令採給ふも誰小乞せ給ふとも無と以
て素戔嗚尊以前ハ未其國ハ成定らずして萬國
の中ハ僅ハ韓地のみ已く開けたりと其也
しつハ後の事あり右の建邦之神ハ造立國家之神也
と有を以て大地萬國の始ハ此素戔嗚大神の造立と
せ給へり御事ありと思ふ可し
是即二柱御祖神の生
給へるを承て此素戔

又傳せ七卷十丁小
注せる其御子五
十柱神とハ韓國
伊弉諾神とも申す
御事と申合可し
者あり又

鳴尊の國土を經營し給へり坐ける所以あり平田
翁の赤縣太古傳ハ天地二皇と二柱御祖神とハ入皇
氏と素戔嗚尊ハ當りたりハ彼此打合て其愛し説
あり彼土の古傳ハ人皇氏九頭九男相繼像其身九章
故曰九皇衆雲祇車駕六提羽而出谷口分九河依山川
土地之勢裁度爲九州謂之九國因是區別各居其一故
曰居方氏人皇乃居中州以制八輔北名州之始也今其
説と略記ハ可識九頭九男相繼ハ九男子小分形一給
ふと云ふ各其九州ハ一ハ今居給ふ故曰九皇と
有は是あり衆雲祇車駕六提羽と有ハ天磐船の類ハ
鳥命天壁立廻坐之と有と思ふ可し出谷口ハ春秋命
歴序ハ人皇出賜谷と云は是ハ扶桑神州ある賜谷
の地ハ出せ給へり由あり或説ハ赤縣の古書ハ
海又東海或ハ大瀝と稱す者ハ我皇國云ありと云
れハ谷ハ海の義ハ出谷口ハ出東海と云小等ハ
りハ可分九河依山川土地之勢裁度爲九州ハ予ガ
謂ゆる國引ハ故事是少大地萬國の依り所を見定
とせ御在ハ坐て土地を増減一ハ邦と建り給へり
と云あり其爲九州ハ其太古傳ハ河圖括地象小崑崙

之墟下洞含石赤縣之州是爲中則東南神州曰晨土正
南迎州曰沃土西南戎州曰滄土正西弁州曰并土正中
冀州曰中土西北柱州曰肥土正北玄州曰咸土東北咸
州曰德土正東揚州曰申土正有引之禹貢の九州ハ
赤縣州内を九州と爲りて擬あり眞の大九州ハ此
大地の全を云みて姑く赤縣と中として方位を定た
る者あり其東南神州ハ我筑紫國ハ當り正南迎州ハ
呂宋も方位ハ叶へり西南戎州ハ南阿米理加もど
其方ハ當り正西弁州ハ阿羅備耶又阿夫理加州もど
其方あり正中冀州ハ即赤縣州を云あり西北柱州ハ
要魯己州叶へり正西阿玄州ハ謂ゆる氷海夜國の邊ハ
可く東北咸州ハ北阿米理加ハ當り正東揚州ハ我
大倭豊秋津島も可く由云々然り今何れと限り
て指べきハ非れども太抵ハ然り可く但赤縣を中土
と爲りハ人皇氏の彼土より方位を指給へりハ依て
の事ハころ有りれ實ハ皇國と正中ハ其の事ハ
共あり諸石の各居其一ハ上ハ皇國と有る是ハ此
素戔嗚大神の正身ハ皇國ハ御在り坐して其餘の八
州ハ各其分身を置給へり事ハ心得べし然り時ハ
人皇乃居中州以制八輔ハ元葦原中國ハ御在り坐て

四夷ハ皇を御一給ふ御事と見て有べきの因云
我が上古の傳説ハ此ハ漏て彼ハ傳ハハ事の無ハ
非り事本ハ萬國同一日の神代ハ實ハ正ハ然
有る可事あり然れども各其書典ハ記すことハ又
其國を本として記傳ふる事も亦止べし其事共
あれども其眞古傳の傳ハ皇國ハ人ハ其等の
古説を聞ゆも見ゆも甚く用捨して心得べき事ある
と近頃異し一種の學起りて其新奇ハ心惑ひ
いて本末を取誤つ事ハ少くも然り素戔
見ゆねハ大小心を用ふ可事あり然り素戔
鳴大神其國引の御政畢とせ御在り坐て此國ハ經營
の御事とバ國作大己貴命ハ事依り授奉とせ御
在り坐けり其ハ傳ハ三十三百八
ハ丁上十二ハ注一奉れりガ
如く此正書ハ生兒大己貴神因勅之曰吾兒宮首者即
脚摩乳牛摩乳也と有る己小其坐坐一須賀宮と

此神小讓り聞えさせ給ひ其外祖父母神をば傳づこ
小奉らせ置いとハ其長あらせ御在り坐を待て國作
の大業を事依り奉らせ給り御結構ある御在り
坐けり程古事記に見えたりハ此小八十神の事故有けりハ御祖奇稻田姬命
の御心と爲て御兄大屋毘古神五十の御許小紀伊國
小参らせ給へ又其神より田御父大神の御所小
奉遣り給ひけりハ此大己貴命の生成と試させ御
在り坐り御爲小種々の御害めども種シナカホ多りけりハ
其御妻須勢理毘賣命を負奉りて御父大神の御心小
愛りけり思ひ御寢坐り人間小逃出しせ御在り坐

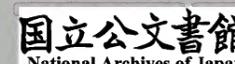
けりハ大神の追至り御在り坐て遥望遥謂大穴牟遲神
曰其汝所持之生大刀生弓矢以而汝庶兄弟者追伏坂
之御尾亦追撥河之瀬而意禮爲大國主神亦爲宇都志
國玉神而其我之女須世理毘賣爲嫡妻而於宇迦能山
之山本於底津石根宮柱布乃斯理於高天原冰椽多迦
斯理而居是奴也故持其大刀弓追避其八十神之時每
坂御尾追伏每河瀬追撥而始作國也と有る是即御父
大神の御命と奉て大國主神と成らせ御在り坐て國
土を經營らせ給ふ始あり上四十小注せり國作大己
貴命又大國作神と申奉り御名義を考て其然り所以

と知べき者あり若て出雲風土記小意宇郡出雲神戸
郡家南西二里廿步伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂
乃命五百津鉏神鉏所取而所造天下大神穴持命二
所大神等依奉故云神戸他郡等神と有同神戸ハ熊野
戸且如之
神宮と宇迦山本宮ニ所大神の御料充とせ給へり若て
五百津鉏神鉏ハ所造天下大神穴持命の御上小係れ
ふて其大神の根國入御在坐以爲て先小事依
奉とせ給へり表物を授とせ給へりみづ有り者
其記ハ所造天下大神とハ所造天下大神穴持命と
所造天下大神穴持命とハ
ハ所造天下大神穴持命とハ百と以て担任せ天下と

經營り終ふ大神と申奉りハ唯此國作大己貴命の
御在坐ハ但此二所大神等と云事を平田史ハ
を補いて文と成ハ大穴持命ハ下小彦名命の御名
も非ぬ私事あり由己ハ傳ハ卷百廿三丁の細書ハ
辨へたりハ如抑其少彦名神の頭ハ出とせ給へ
ハ素戔嗚大神の根國ハ赴りせ御在坐ハ後ハ
大己貴命の國作の半の程ハ有ハ此ハ唯
御父ハ所大神等の神戸と定めとせ給へり御事
外ハ無ハ者若て古事記ハ故大國主神坐出雲之御大
之御前時自波穗兼天之羅摩船而内剥鵝皮剥爲衣服
有歸來神略即召久延昆古問時答白此者神產巢日神
之御子少名昆古那神故尔白上於神產巢日御祖命者
答告此者實我子也於子之中自我平俣久岐斯子也故

與汝葦原色許男命爲兄弟而作堅其國故自尔大元年
遷與次名毘古那二柱神相並作堅此國之所見たりと
此一書ハ初大己貴神之平國也行到出雲國五十狹
狹之小汀而且當飲食是時海上忽有人聲云々と有て
殊ハ委しきと此ハ國作の御事を云じ故ハ彼記
と引あり儲此ハ初大己貴神之平國也と有ハ又其
神の興言ハ夫葦原中國本自荒芒至及磐石草木成能
暴強吾已摧伏莫不和順と有り其御時の事ありと
彼八十神と退治御在坐て己ハ國と作りせ給ふ始
あり可事上五十八丁八十戈神の所ハ云説共を以知べ

一若て此ハ少彦名神の依來坐ハ予が常ハ謂ふ彼
皇產靈神の預鑄造一給ふ所以是あり此ハ天神の御
許ハ白上りせ給ひりバ與汝葦原色許男命爲兄弟
而作堅其國と令せ給へり此即止文ハ戮カ一心と云
ふ所以あり事上百四十九丁小注セハ如く儲此國を作
堅りせ御在坐り狀ハ上百五十六丁小引ハ大三輪神三
社鎮座次第ハ地稚如水母浮漂之時大己貴命與少彦
名命戮カ一心殖生蘆葦固造國地故號曰國造大己貴
命因以稱曰葦原國と見え仁明天皇御紀歌ハ日本乃
野馬臺能國遠賀美侶伎能宿那毗古那加葦管遠殖生



志津國固米造介牟與理ト有先此事を物爲ト給ひて

狭國と廣く物爲ト給ひ又上百四十引万葉歌

七二十大穴道以御神作妹勢能山見吉六二十大

汝小彦名能神社者名著始鷄目名耳字名兒山跡負而

云ト有ハ更あり諸國の國中と平夷ハ爲給ウ

てハ山と作給ひ又或ハ山と磔カ水と通レ田地と

成一斯ハ如く爲レ峻國と平けく物爲ト給へルハ

と實ハ正ハ有將欲ト隨ハ御心足ハ國造リ固ト給へ

給へりけりハ天下ハ人民ハ所と得て住著く始ハ

此御時ハありけり故ハ万葉十八二十於保奈牟

知須久奈比古奈野神代欲里伊比都藝家良志云ト

有ハ如く物ハ始ト此二柱神ハ係レ云事ハ實ハ所

以有ハ事ありけり其始ト二柱御祖神ハ天降坐ス時

小天神諸の御命以て修理固成是多陀用幣流之國と

詔言て事依レ給ひ此ハ天神の御命以て此二柱

神ハ爲レ兄弟而作堅其國と詔給ひ附カ御在一坐一

ハ此ハ於レ二柱神相並作堅此國と有ハ即此ハ謂

ゆる夫大己貴命與ハ彦名命ハ一心經營天下ト有

り是ハあて悉ハ其由來有レ實ハ縁の御事共ハ御

在一坐一右の其國ハ高天原ハの御言ハ此

下四百七十一此御事
と合せ説と考合ナ可ク

小御在坐ての御上を云為るを以あり其と此との用法甚何怪き事あり諸私記小經營天下を安せ乃只多乎津久流と有ハ此字小當れらあがり足ハず上小云々如く經營とハ都久理多麻比と讀て下へ續く可事云も更あり儲若谷重遠説小經營天下謂畫田疇均賦役之類凡安韓百姓之事所謂作國也と云ハ此ハ當り然ハ國土の大体を經營せ給ハるハこり有れ然ハ負細し事と以て何ぞ作國とハ云べし神造の大ある事と知ずし人事のハ事小説掠りハ彼徒の僻あり凶諸古語拾遺小此字有と之餘枚ハ經營詩大雅靈臺篇經始靈臺經之營之注經量度也營謀爲也又文選皇漢之初經營也嘗有意乎都河洛銑曰〇復ハ石小經營天下ハ有ハ此經營猶攝立也と有り

二柱神の御本業小御在坐て其ハ國土を開闢て人民を蕃息し給ふ御事あり其要ハ食物衣服住宅の儲と國土小備へ人民小饒あり給ふ御政是

上百五十引カ出雲風土記小飯石郡多祢郷屬郡家所造天下大神大穴持命與須久奈比古命巡行天下時稻種墮此處故云種神龜三年と見え伊賀風土記小此郡始屬伊勢國云阿波莊天照太神自天上下天之阿波主給五穀長蔓故名阿波謂阿孟者音訛也と有共と以て二柱神作堅其國と詔言給へ天神の大御心を思ふ可き者あり又駿河風土記小富士郡檀原豐麻神社ニ坐所祭大己貴命與少彥名命也と有ハ此と以て諸穀諸菜諸果桑麻等と殖生し給ふ御事業の此小盛ありけ

心御事と想像し奉る可くあり有ける山村を生して

屋を建る事ハ一也己ハ第四第五一書ハ所見たるカ
 如ク素戔鳴御父大神其御子五十猛命大屋津姬命执津姬命
 等ハ成一置給へると更ハ此ニ柱神ハ成整へりけ
 事申すも更あり此ニ柱神。經營天下と有る事の
 要ハ專此ハ在と又別ハ醫藥と禁厭の二ハ一も殊更
 ハ飲く可くハ人民の急務ある故ハ傍其事と起
 せ御在り坐ける御事を記すを以て此ハ復字
 とい置れたるハ復斯ハ其事己ハ然ハ此事
ハ用うる字ありハ更ハ注ハ復斯ハ云々ハ此ハ常
 下ハ又甚止事無事共の有て説ハ又曉り難ハ
 所ありと以て其塚と置て今此説ハ及べりハ

此ハ定めさせ給へりハ醫藥と禁厭との二あり然
 して其醫藥ハ疾病を療め禁厭ハ災異を攘ふ道ハ
 此ニ共ハ並備ハハ天下の人民一人として
 身を全くと命を保つ事を得べくハ不む有けりハ
 此ハ天下を經營ハ御在り坐ける即其事と定めり
 せ給へりありハ此ハ傳ハ二百四十一丁十三
 百四丁注せるハ如ク伊弉諾大神の黄泉國の穢れハ
 行觸御在り坐ける其御身ハ著させ給へり物と投棄
 させ給ひける其物ハ依て成坐る時置師神煩神開密
 神煩神等
 神の三神ハ疾病の事を掌とす神等あり古事記ハ

△伊弉諾大神
方十五里耶美一伝
條小鎮藥神祇宮
乃西院仁所傳之也
元古伊弉冉尊乃
神方也日佐政以加
那法波仁於給仁研
大水三三煎入煎用
而藥茶三首之奈平
紫麻と成り林一獻
又海病の法に成り
事にて下三三三
乃やう鎮花藥即
疫瘧の藥方と成り
カカ等一々有る

△伊弉冉尊傳方
二見伊弉冉尊傳方
郡伊弉冉尊傳方
伊弉冉尊傳方

△他紀波良藥
元者禮受姫尊上
神父須理也見也
備

伊弉那岐命告桃子汝如助吾於葦原中國所有宇都志
伎青人草之落苦瀨而患惚時可助告賜名号意富加牟
豆美命之有ハ疫鬼を攘ふ禁厭の事とも相兼醫藥療病
の始あり又鎮火祭詞ハ伊弉冉大神の火女神ハ被燒
せ給へり時ハ此能心愈子乃心荒比曾水神匏植山姫
川菜并持鎮奉礼止事教悟給支と有ハ火大熱を去り火
燒を癒醫藥方と定めし給へりあり△又大同類
聚方ハ淡路藥と有ハ私注云此方傳淡路國津名神社
也官取爲濟民之方也按津名者伊弉諾尊之宮趾也裕下
大己貴命之裔大神資古在淡路而遺此社之方也津名

神司中臣好根傳文載之と有ハ津名神社の方の其社
ハ亡大己貴命大神資古傳ハ此ハ遺大神資古なりあり
又鎮藥又鎮筑紫築前國曾形君等云ハ傳伊弉諾尊
傳又道反築筑前國阿曇連等之方元伊弉諾尊傳方と
有ハ外ハ此彼有り己ハ其大神の定めし給ふ所
如此を犬上藥近江國山田里民間所傳原者素戔嗚尊
所授方也と有ハ素戔嗚大神ハ醫藥の方を物爲し
せ給へり趣あり又古事記八十神段大穴牟遲神の燒
殺ハ此給へり所ハ其御祖命哭患而參上于天請神
産巢日之命時乃遣賀貝比賣與哈貝比賣令作活尔賣

貝比賣岐佐直集而蛤貝比賣持水而塗母乳汁者成麗
 壯夫而出遊行と有ハ此即天上より降りて病を療め
 給へりあり如此く二柱神以前より已ハ醫藥の事ハ
く又病を得ても自療り方と著
 有ハりとも甚く上り代ハ病も甚かりけむと
追次テラ
 今如此天下と經營せ給ふ上ハ自然ハ人民も蕃息
 あり其小就て互小萬小事業繁く成ハ者少ハ有けりハ
受事多ク成行つて己ニ療む事ハ甚難キ事ナリ
 内外より病と釀テ事將多ク成ハ勢ありけり程ハ此
 小於て其療り方と立とせ御在ハ坐すてハ得有まド
 かりけり自然の勢ありけりハ是が此二柱神の薬師
 神と御在ハ坐す所以ありけり
猶大同類聚方小須西
利藥出雲國神門郡從

見元大里集紀
 國那賀郡荒日神社
 傳方元者立火出
 見尊壹岐國石田
 郡石田山乃神仁得給
 事也

八位上神門臣等之家傳方其元者和加須西利比賣命
 所授也と有ハ此姫神ハ古事記ハ所見たりカ如
 く大國主神小禁厭ハ法を教ハ聞えテ助奉りハ御
 事ハ御在ハ坐すけりハ又医藥の事ハ其功ハ鏡藥讀岐
 御在ハ坐すけりハ此ニ柱神ハ後ハ鏡藥讀岐
 國香川郡田村神社傳方元波猿田彦神割云ハと有リ
 又日向藥弘云一日高十總藥是也大伴宿禰家守傳之
 奏也又日向高見藥日向國宮崎氣早乃方と有リ此ニハ
 天孫降臨ハ地多りけりハ天上より傳ハりたりハ
 出見尊壹岐乃石麻呂得此方と有リ諸本草和名ハ
 飛廉云ハ和名曾ニ岐一名布保ハ天久佐と有リ彦火
 久須祿一名以波久須利と云類ハ此尊ハ初て用ハ
 試ハ可ハ神代ハ醫事ハ盛ハ若て疾病ハ共ハ世ハ並行
 可ハ事此を以て見ハ可ハ若て疾病ハ共ハ世ハ並行
 禁厭ハ古事記ハ所見たり右ハ疾病神と

共小成坐ル神小奧踈神邊踈神奧津那藝佐昆古神邊
津那藝佐昆古神奧津甲斐辨羅神邊津甲斐辨羅神等
の六柱有リ是ルあり四神出生章第九一書小是時雷等
皆起剛追來時道邊有大桃樹故伊弉諾尊隱其樹下因
採其實以擲雷者雷等皆退走矣此用桃避鬼之緣也時
伊弉諾尊乃投其杖曰自此以還雷不敢來是謂岐神此
本號曰來名戸之祖神焉と所見ル桃實を擲給へル
鬼と避り禁厭あり又其杖を投給へル道饗祭の起
あり事傳十三九十丁小注ルか如ク若ク其大神の攝小
戸小御在一坐テ祓除ニ爲給へルと右の道饗祭とハ共

小禁厭の類あり祓除の禁厭あり事ハ備後風土記小
疫隅國社昔北海坐志武塔天神南海神之女子并與波
比小出坐小日暮彼所蘓民將來二人在伎兄蘓民將來
貧窮貧將來富饒屋倉一百在伎爰武塔神借宿處借而
不借兄蘓民將來借奉即以粟柄爲坐以粟飯等奉饗畢
出坐後小經年率八柱子還來而詔久將來之爲報答曰
汝子孫其家小在哉止問給蘓民將來答申久己女子與
新婦侍止申即詔久以茅輪令著於腰上隨詔令著即夜
小蘓民與女子二人并置天皆悉許呂志保呂保志夜即
詔久吾者速須佐能雄能神也後世仁疫氣在者汝蘓民

公靈異記中
人の病一ける事
をてて正薬
療病不癒喚
皇ト者而後祈
禱と百る是ハ聖
武天皇の御代の
事アリ月六日
事ト云々可
△年久佐能部毛能
と訓り是なり

物語あり、當時の事を似せて書る物あり、故に其項
の世態を知る事あり、右の如く人の疾病の時、當り
て祭後と持懸、事ハ其禁厭の遺制あり者あり、此等
ハ賢一立たり人の爲に事あり、有れども却りてハ
神代の道ハ皆
○顯見蒼生ハ己ハ傳十四百五十ハ云
ケル物あり
○畜産ハ古本ハ祀母能と訓く下あり、獸をハ祀陀
母能と訓く正、然りハ傳十四百四十ハ且
ニハ注せらる、如く大祓詞後釋ハ和名抄ハ獸和名介
毛乃畜和名介太毛乃と有ハ相誤れり、可ハ神代
卷ハ同一續の文ハ畜産と訓く獸と訓く正、
可ハ略、諸祀陀母能ハ毛津物の意あり、可ハ古書ハ毛
乃和物毛乃鹿物と云、祀母能ハ飼物の加比と切

めて伎あるを氣と云りあり、伎と氣とハ殊ハ親ハ
て常ハ通ハ音あり、毛物の意ハ非ハ六畜ハ人家ハ
飼置ハ物ハバ飼物と云あり、と云れたり、諸六畜ハ
事、天武天皇四年御紀ハ畜肉と禁止、
牛馬犬猿雞之実と有、ハ獸の猿とハ加ハて此ハ
ハ五畜あり、然りハ和名抄ハ畜野王按六畜、
畜生ハ軸生ニ音、牛馬羊犬雞豕也と有、此ハ其
和名介太毛乃、
數合ハと雖も羊ハ豕ハ本より皇國の有ハ非ハ除
去ハ唯四畜のハあり、諸大祓詞ハ畜犯罪と云、一條ハ
有ハ當りて古事記訶志比段國之大祓の所ハ馬婚牛

婚鷄婚犬婚之罪類と有れば我が上古畜産と云りハ
 牛馬鷄犬の四あり事著明き者あり其ハ雜令小九畜
 産能く者截踏西角踏人者絆踏之踏人者截踏西耳其有狂犬
 所在殺聽殺之と有り其能く人者と云ハ牛あり踏人者
 と云ハ馬あり踏人者と云ハ犬あり狂犬ハ其甚しき
 者と云あり右小鷄と云ざりハ然り人を傷ふ程の者
 ありざりと以り然れば西戎小六畜と云目の有と
 取取物ハ書れたるも羊とて豚とて猿とて加へ
 て合せる物々右の四畜の外ハ定無用なり一事と
 所見たり但此ハ我上古の畜産の説あるが己小古事記

小所見たり如く稻羽之素菟の裸裸成て其痛苦て泣
 伏り時小於是大己牟邊神教告其菟今急往此水門以
 水洗汝身即取其水門之蒲黄敷散而輟轉其上者汝身如本
 膚層必差故為如教其身如本也と有り斯の物と病と
 ずく小療治給へれば世生活と一生活り鳥獸虫魚の
 皆小至り迄何れも此二柱神の恩頼と蒙るるなりけ
 り故一條大閤ハ畜産詔馬牛犬豕羊驢鷹鷄猫等と
 事廣く注給へりハ尤あり御事あり皆此畜産
 の字ハ厩庫律小故殺官私馬牛者云々及殺餘畜産云
 又條云放官私畜産損食官私物云々又條云官私畜
 産毀食官私之物云々有る畜生と云ハ異あり言
 餘皇國後劉寬傳寬大醉罵人曰畜産と云事とも引り
 此ハ皇國畜生と云と同類あり○為ハ下あり為攘小對

大正神三社
改字の條に於て
御宇天皇初
大建永幣帛於
神上祈禱無
供時神相
承隱言遠津
與言及和魂
多時自王孫
去二百

へり所ありは意補を加へて爲濟の如く見り可し其ハ
上五丁百五丁引り文徳天皇實録小常陸國上言鹿島
郡大洗磯前有神新降中時神憑人云我は大奈母知以
奈比古奈命也昔造此國訖去往東海今爲濟民更亦來
歸と所見たり昔造此國ハ此小謂ゆり經營天下あり
去往東海謂ゆり常世郷小到坐しありと其歸渡給
ふ方を以託給へりあり今爲濟民來歸ハ今小國土を
已惻作堅置給へれば醫藥を以て民命を濟ふ事
を守り給へりとの御事あり神名式小常陸國鹿
島郡大洗磯前藥師菩薩神社大神那賀郡酒烈磯前藥

師菩薩神社大神と見え菩薩の二字ハ當昔の習俗小因これ
あり可くして僻事ありども此両社小藥師の号を以
て稱奉りてを以て右の爲濟民の義をも知べしあり
伊豆風土記小菴温泉玄古天孫未降也大己貴命與以彦名
我秋津洲憫民大折始製藥湯泉之術下有此憫民
大折の句も亦右の爲濟民の御言の意と異ありと
と思ふ可くあり大同類聚方小も神惠濟人之良方小
と云事の首を合せて此ハ爲濟頭見蒼生及畜産の義
小見り可くあり有ける故此二柱神の恩頼ハ右
の如く人類を始として遍く畜産迄亘り事實小仰

予奉々小也尊々奉々小也言々及び難小也如牛馬鶏
犬小至々迄小憫々濟ハセ給ふ事ハ各々其天下人民
小飼れて人の使令と爲る者ふれバあり斯々畜産と
す小惠々濟ひ給ふと云々其と使令ふ可々人民と
殊更小大切小所思一給ふ故ふる事申すも更あり
通證小襄陽記曰雜主司晨犬主吠盜牛負重載馬涉遠
路と有ハ然々言々何れも其主とら所有て國家小
用有る物共ふれバ其病と療ひ
方も必無しハ得有る事あり 通證ハ右の文共と
引て今按藥師訓久須志光明皇后佛足石歌所謂久須
理師是也云々と云れたるハ實小然々言あり今其歌
と考うるハ久須理師波都祚乃母向礼等麻良比止乃
伊麻乃久須理師多布止可理家利米太志可利鶏利と
有る初々句醫ハ藥師ハ尋常のも在れと云事あり

△神名帳頭注若
大洗磯前と大己貴
命といふ酒河磯前
と云々各命と云々
りて二柱神と
藥師神と稱する事
と知ハ一武藏風土記
には原郡熊谷神社
飲連天皇三年癸巳
八月所祭大己貴命也
社傳有熊野新事
云々祈禱者聖之服之
其印願如神土俗曰
藥師水と有と云々
も念書あり

此國の醫と云あり三四句ハ蕃神の今の藥師と云事
小て其藥師寺の本尊と云あり又今一處小久須理師
毛止牟與伎比止毛止元とも有れバ此三證を得て右
の神号の藥師とも亦醫とも久須理師と訓べきあり
猪大同類聚方小於保奈牟知命乃美已止仁中略古連
乎久須乃里登伊婦と有々久須乃里ハ藥方と云事ふ
り本草和名小石斛と須久奈比古乃久須祢と有ハ少
彦之藥根あり又儀式五月五日節義ハ續命縷と此間
語藥玉タスダマと注々々たりあどを思ふハ其本語ハ久須小
て即例の奇異クニイの義ありけり若て久須理と云ハ石の

日本書紀傳十九

言を本^{アリ}し^{アリ}て在^{アリ}る^{アリ}の形状の語を以たる^{アリ}し^{アリ}て其^ク奇^ク異^ス
ある物の状を云て即藥物の稱とい成れ^ルる^ルあり傳^テ
二^{三四}十^十小^小云^云る^る如^如く^く白^白木^木の^の招^招魂^魂の^の功^功有^有り^り牛^牛扁^扁の^の痢^痢と
忽^忽小^小治^治す^す驗^驗有^有る^るの^の類^類も^も草^草根^根木^木皮^皮共^共小^小悉^悉小^小奇^奇異^異
一^一主治^{主治}の^の能^能有^有と^と云^云稱^稱あり^り然^然し^して^て久^久須^須理^理師^師と^と云^云時^時
ハ其^其奇^奇異^異る^る草^草根^根木^木皮^皮の^の能^能毒^毒を^を知^知て^て採^採り^り其^其疾^疾病^病小^小
應^應せて^て此^此を^を用^用ひ^ひて^て其^其本^本小^小復^復す^す謂^謂ある^るが^が久^久須^須理^理師^師の^の
師^師ハ^ハ埴^埴土^土以^以て^て器^器物^物を^を製^製造^造ハ^ハ入^入を^を土^土師^師と^と云^云ふ^ふ師^師と^と一^一
事^事あり^り物^物を^を成^成造^造ハ^ハ謂^謂あり^り然^然れ^れハ^ハ藥^藥爲^爲土^土爲^爲ハ^ハ義^義あり^り
を^を其^其土^土師^師と^と後^後ハ^ハ波^波士^士と^と唱^唱ふ^ふと^と等^等し^して^て此^此久^久須^須

理師とも略きて久須師とハ云習へる^ルあり^り有^有け^けり^り
斯^斯れ^れハ^ハ藥^藥師^師と^と書^書く^く師^師ハ^ハ師^師弟^弟の^の師^師ハ^ハ義^義ハ^ハ非^非ザ^ザリ^リて^て
爲^爲の^の意^意ハ^ハ用^用へ^へる^る假^假字^字の^の如^如き^き者^者あり^りケ^ケリ^リ允^允恭^恭天^天皇^皇三^三
年^年御^御紀^紀ハ^ハ良^良醫^醫と^と書^書く^く久^久須^須師^師と^と訓^訓ミ^ミ推^推古^古天^天皇^皇三^三
十^十日^日年^年御^御紀^紀の^の醫^醫惠^惠日^日と^と録^録明^明天^天皇^皇元^元年^年御^御紀^紀ハ^ハ藥^藥師^師
惠^惠日^日と^と作^作れ^れ又^又此^此事^事を^を通^通證^證ハ^ハ引^引れ^れる^る孝^孝謙^謙天^天皇^皇御^御紀^紀
小^小德^德來^來五^五世^世孫^孫小^小治^治日^日朝^朝廷^廷御^御世^世被^被遣^遣大^大唐^唐學^學得^得醫^醫術^術因^因
號^號藥^藥師^師遂^遂以^以爲^爲姓^姓と^と所^所見^見たり^り醫^醫術^術と^と成^成り^り者^者と^と藥^藥師^師と^と
云^云證^證是^是あり^り又^又通^通證^證ハ^ハ大^大寶^寶積^積經^經曰^曰辟^辟言^言如^如藥^藥師^師持^持藥^藥能^能去^去病^病
以^以稱^稱善^善薩^薩從^從俗^俗稱^稱也^也今^今也^也諸^諸國^國二^二神^神之^之所^所鎮^鎮座^座至^至莫^莫不^不安^安
藥^藥師^師佛^佛呼^呼阿^阿不^不亦^亦甚^甚也^也哉^哉又^又存^存化^化跡^跡於^於石^石像^像良^良有^有以^以也^也式^式

能登郡國羽咋郡大穴持神像石神社能登郡宿奈彦神
像石神社云々之れは實小然り言ある者あり
○病ハ大同類聚方持一章於保奈年知命乃美已止仁古迺
美波阿萬乃保乃計都知味豆河治平奈伽和太仁伊連
都都字從伊太須古登乃太要邪流平都倭止之底曾能
奈訶美仁万登輔仁本比凭倭邪奈須岩衣奴平耶麻比止
伊布故麗平萬自奈比耶牟流仁能里阿理故以下十五
故連乎耶牟留仁耶是古連輔仁本平久須乃藥方輔仁本
通乃能里袁差堂牟作禮乎久須乃作能里登
輔仁本伊婦輔仁本と所見たり此事と説得れば病と
云言の義ハ知々めり無病の偕此御言ハ頭身と生出
て世中ハ在經無病の常を宣ひて其變あり有病の事と明

させ給へる物々決めて簡易小御言を終りさせ給
へり小依て其蹟あり甚見元難く今一二小注
奉可天先阿萬乃保乃計ハ人身小出入天氣是
あり次小引都知ハ穀肉果菜あとの土毛と云ウケケゆり味豆ハ湯
水と云あり阿治ハハと水とを合せて酒と成り豆
と鹽とを和せて醬と成す類少く物と物と相合せて
一ハ食物と成れり火氣其第三章小保乃解波久知
與里伊喇波奈與喇波故備豆奈伽和多仁保乃岐波故
比豆美豆河治平訶母反云々第四章小美豆波能氏區
日乃安治萬計奈喇久智與喇奈可味太仁伊喇萬自陪

〇百〇其言の事
 河津に訶堂平流訶
 計氣如與波世訶
 河津波流の事
 伊連都伊太須古登乃太要邪流平都倭止之底
 有が如く其天火氣土水味共の内小入り物ハ其營爲
 成れろ渣滓ハ又外小出て或ハ氣と成り又ハ尿と成
 り尿と成て出去小随ひて日と小新ある時ハ病何れ
 ありハ其身を犯して入り事の有は是を常とハ云
 譬へバ日行き月來り寒往き暑來り如くして天
 地の氣並び相行ハれ時ハ百穀成り人民安き
 雨時あり寒暖度を違ふ多時ハ天地の氣相違ふ風
 有ハ即天地の間小取て變あり又病あり同トきを

保乃解仁訶堂世天云と有て土化水味共の中火氣中
 火氣小釀成して身体の營爲と成る事あり故奈伽和
 太仁伊連都伊太須古登乃太要邪流平都倭止之底
 有が如く其天火氣土水味共の内小入り物ハ其營爲
 成れろ渣滓ハ又外小出て或ハ氣と成り又ハ尿と成
 り尿と成て出去小随ひて日と小新ある時ハ病何れ
 ありハ其身を犯して入り事の有は是を常とハ云
 譬へバ日行き月來り寒往き暑來り如くして天
 地の氣並び相行ハれ時ハ百穀成り人民安き
 雨時あり寒暖度を違ふ多時ハ天地の氣相違ふ風
 有ハ即天地の間小取て變あり又病あり同トきを

思ふ曾能奈訶美仁万登比瓦ハ其身体小纏附くと
 云ふ万登布ハ万葉十三丁小藤浪乃思纏二十三丁小
 波保麻米乃可良麻流伎美字あり有て物小搦す纏
 附て離るすトきを云言めて身体小搦す病を纏
 云を以て其難事と察り可一倭邪奈須裳奴字の倭
 邪ハ謂ゆる災異めて氣と纏うと食と搦すと
 の二途有り其浣葬乃慕登比と云條少彦名命乃美
 古登仁阿旨解王邪阿旨阿治味差乃不言太津者耶麻比
 乃門止南刹と有は是あり此事傳十本二百四丁小時置師
 神小合と己小委と説たり己小如此病の事

〇百〇其言の事
 河津に訶堂平流訶
 計氣如與波世訶
 河津波流の事
 伊連都伊太須古登乃太要邪流平都倭止之底
 有が如く其天火氣土水味共の内小入り物ハ其營爲
 成れろ渣滓ハ又外小出て或ハ氣と成り又ハ尿と成
 り尿と成て出去小随ひて日と小新ある時ハ病何れ
 ありハ其身を犯して入り事の有は是を常とハ云
 譬へバ日行き月來り寒往き暑來り如くして天
 地の氣並び相行ハれ時ハ百穀成り人民安き
 雨時あり寒暖度を違ふ多時ハ天地の氣相違ふ風
 有ハ即天地の間小取て變あり又病あり同トきを

と倭邪と云るハ人の事業マスガと云も和邪と云と一事ハ
 右の如く氣キハ極キも食シハ又精神ハ
 勞ロウづくも皆其自然ある物と我も人も思ふ事あり
 も別ワカ然シハ所業ツカサを成す一種の神有て即其ハ犯トり
 事ハ一有けハ病ヤミを令病シるを倭邪と云事甚其謂
 ね有る事ありハ皆其病ヤミを成すハ何れハ神ありハ
 云ハ上ウヘ百ヒャク九ク十ジュウ
 九ク十ジュウ 小注ハ如く時置師神閑嚙神煩神等の
 三神有て其時置師神ハ謂ゆる惡氣アシケガ災ガイを行ふ神あり
 閑嚙神ハ其惡味災アシケガを行ふ神あり煩神ハ其惡氣アシケガと惡
 味の災ガイ兼カミて精神シロを勞ロウつりハ神カミありハ何れナニハ上ウヘ添ソりあり
 味アジの災ガイ兼カミて精神シロを勞ロウつりハ神カミありハ何れナニハ上ウヘ添ソりあり

万病と云許ハ病ヤミハ一も多オホく有れども其災ガイの元因を
 云時ハ此三ハ過アヒぎり事コト已マハ傳ツタ十ジュウ二百四十一丁ニヒヤクシヨウイチチヨウ小委
 一ハ註ツキせもを見て明アキラく可カし然シハ災ガイ異イと和邪波
 比ヒと云ハ元來ユヅル所トコロ為ナり出デりたる言コトめて神カミハ在アれ人
 小在チれ其成ナす所トコロ為ナる有て其ハ過アヒ方カタ取トルて害ガイと成
 るを云言コトして有り次ハ鳥獸チウゾク昆虫コウチウ之災ガイ異イと有も然シハ
 鳥獸チウゾク昆虫コウチウの強ツヨクハ人ヒトを害ガイけりハ成ナす所トコロ為ナる
 也ナも其ハ觸サスたる此方コノカタの煩ワザカシと成ナる事あり故ユヘハ災ガイ異イと
 云ハをも合せ考カウふ可カし事ありハ此事委ツキハ下
 異イの所トコロを説ツクべしあり大同類聚方ダイトウルイハ和邪波比ワヤハヒと
 云コトして何れナニハ和邪ワヤと書カキて災ガイ異イの事コトハ爲ナり此ハ

就レ思出レけり予ハ淡路國の方言ハ江戸あどレ此
てレ悪レと鳥レと云ふ當り言ハ和邪須流と云り此
あり和邪レ同 耶麻比ハ古事記八千矛神の御歌ハ許
一意味あり 能登理母宇知夜米許世泥と有と記傳十一丁十四小宇
知ハ打あり夜米ハ令病あり許世泥ハ乞望意あり 採
と注され又朝倉官段大御歌の志斯能夜美斯志能と
其四十二丁十四小猪之病猪之と云れ又万葉四 二十丁古
人乃令食有吉備能酒痛者鳥便無貫貫賜年と有り痛
者ハ夜母波婆と訓（和名抄云若紀布奈夜毛非と有り）事あり然り時ハ夜麻比又夜美
夜半夜米夜母と活（夜麻比ハ夜美と延て云）言ありけり此ハ就て考り小
病の言ハ一も弥禍（マヤ）の義あり可一若て其禍（マヤ）と云ハ己

小傳十二丁十四小注せり如く万葉五 三十丁小靈剋内
限者平氣久安久母阿良牟遠事母無堂（堂）無母阿良牟遠
と有ハ平安小一禍事の無り由と希望の由あり
が其下小伊等能伎提痛伎瘡尔波鹹鹽遠灌知布何其
等久益ニ母重馬荷尔表荷打等伊布許等能基等老尔
互阿留我身上尔病遠等加互阿禮晝波母歎加比久
良志夜波母息豆伎阿可志云と云云右の及あり
悪（マヤ）事共と云續けたるを以見れば其堂無ハ枉無
の義あり甚能叶へり又十五 二十丁挽歌ハ和多都美能
可之故伎美知牟也須家口母奈久奈夜美伎互伊麻太

尔母毛奈久由可牟登云々と云いて其結句小伊米能
其等美知能蘇良治尔和可禮須流伎美と有也上小毛
奈久と云一事の違ひて別れたる由あり又二十多婦
尔互毛母奈久波也許登和伎毛故我牟須比思比毛波
奈禮尔家流香聞と有也此母奈久も皆上の同ト唯九
三十見菟原處女墓歌六丁新裳之如毛哭泣鶴鴨と有也
裳ハ喪の意ありバ右と等しと雖も其喪と云
ハ禍事の謂ありめて其も一ありけり伊勢物語四丁
小昔縣へ行く人小錢別々ウチヒトとて呼て外人ウチヒト非り
けりバ家カ自ウチヒト蓋と指せて女ヲ喪束被けりウチヒト主

の男歌を詠て裳の腰小結付さす出て行く君が爲小
と脱つれば我々へ裳無く成小けり哉略と有と闕疑
抄ウチヒト出で行人の爲小裳を脱て遣れば我々へ裳が無
ありとあり毛ハ喪字あり喪字と和邪波比と訓り衣
裳の裳無くと云を以て禍無くと云意を詠りウチヒトと有也
と此小禍災を毛ウチヒトと云事知るやけり諸人の身小纏
ひ揃ウチヒトし病バウチヒトり甚ウチヒトトウチヒト禍事ハ無と物ありバウチヒト弥福
の義ありかて麻賀を切れば麻ありと何れ小も其行
小轉ハウチヒト云言と見えたり故万葉小多く鬼字を母能
九下小鬼と麻ウチヒトの用ひたり小麻ウチヒト母ウチヒト母ウチヒト纏ウチヒトひ揃ウチヒトま
る意と備へたるを此上文ウチヒトりウチヒト續ウチヒトきウチヒト曾能奈ウチヒト訶美

仁万登比无倭邪奈須裳奴乎耶麻比止伊布と有り文
義しも通り思ふ可くあら直指す病の和語止あり
人身の疾病有れ則身の成す所の事止息す故に
り眼と疾め物と見る事無し手を疾め手を使ふ
事能はず足を難め歩む事成難し是皆身の成す所
の用止息するありと云ふ理屈と云ふ物あり右が引
る大同類聚方の趣の合ハず次ニ百十丁の云ふ如
く病と療むりの夜半流と云ふ言有り又齋宮式あり忌
詞の中の外の七言の死称奈保留病称夜須美と有る
正し其事當る言と思ふ其反あり言と被用る例
ありの病若止息の義ありいふ忌詞あり如何あり
事共あり非ず然れ此より外の事も其義と
求る外に無き○療ハ舊訓衰佐牟流と有る從ふ可り齋明天
皇三年御紀小療病と有る也此と同し病乎衰佐牟
流と訓り私記あり此の療病之方と也末比牟佐牟年
乃利牟と有る字佐牟牟年將治の字義あり此

禁厭とハ麻自那比夜牟流と有るハ猶舊小從ふ可
一亢泰天皇前紀小我不天久離篤疾不能歩行且我既
欲除病獨非奏言而密破身治病猶不差又其三年御紀
小醫至自新羅則令治天皇病未經幾時病已差也有
り此等ハ病と愈る事と治と云證あり古事記同段小
也此時新良國主貢進御調八十一艘ハ御調之大使名
云金波鎮漢紀武此人深知藥方故治差帝皇之御病と
有と記傳三十九丁小治差と衰佐牟奉伎と訓べ差
字ハ義と以添なりあり何事あり善く成りと治む
と云りと云ふ又欽明天皇十三年御紀小國行疫氣

△又皇極天皇十四年
御紀の以此治之病無
不差果如所治無不
痊の事也思ふ

民致^シ妖殘久而愈多不能^レ治療敏達天皇十四年御紀馬
子宿禰の偽れり奏言し臣之疾病至今未愈不蒙^二三
寶之^一力難可^レ救治と有る右等の治療とも救治とも治
字例の如く袁佐年と訓べしあり猶記傳に引れたる
續紀第三詔に朕御身勞坐故暇間得而御病欲治又三
代實錄廿九卷詔に御病に治賜に病を癒す事を
治とも云るハ國中も家も身も常々云と等
く有^レ其物を上り御も義あはれ其云ふ意味が
む同ト事ありける名義抄に療字に伊夜須と云訓
の有り即病に伊夜須と云ハ彌安の義あり可^レ右
ふ云る如く病に彌福の意あり其反あはれ

△大同類聚方輿集
小故連平耶牟留仁
耶通乃能里哀差
堂牟と有る耶牟留
二一

あり其病の癒多事を云も直らんと云も其病ハ禍事
を以てあり續紀第五十八詔に元月頃間身勞須止聞
食且伊都之可病止と有る公其起りて百病の止む
意ありし伊由と云ハ其異ありと三代實錄廿六
卷詔に皇帝御體に勞苦給處有る依云に即愈息萬
利給比奈元止と有る愈息ハ夜須麻理と訓て齋宮忌
詞に病に夜須美と有ると同ト休^レ謂^レあり其も勞
れを安むり義あはれ伊由の強^レ安^レありとも強^レと
ハ思え
○方とハ能理と訓べし官本金澤本ハ更あり
古語拾遺地神本紀等ハ更あり己の引り私記にも
療病の方と也未比牟左米牟乃利牟と有る更^レ論
無きを猶右二百ハ出せり大同類聚方小故麗是千萬自
奈比耶牟流仁能里阿理古連牟久須乃里登伊婦と所
見たる能里阿里ハ即有法則あり久須乃里ハ藥方小

別
和可知天久遠能利
平左衛門
又平左衛門能如左
平左衛門能如左
佐院武造之マ事
也所見

ふて此小謂ゆる定療病之方是あり借右下三六六小注カキの文を輔仁
本ハ故連平耶牟留仁耶通乃能里袁差堂牟古禮牟
久須能里止伊布と所見云なり耶通乃能里とハ大祇小
病門とハ拜科乃美吉登ひて其規則を立とせ給へり
めて其次彦名命條小味座乃倭訶知應訶並倭耶能民
區日阿太利致乃味座保豆粒乃於止侶陪不連流味坐
放比阿當利裳濃乃計哀佐南倭座と有都ハ條有
此と云あり然れども其元因と惣云時ハ阿旨解王耶
阿旨阿治味差乃不太津者耶麻比乃門止南別と有
是めて惡氣災ハ外内入り病あり惡味災ハ内内

△事下三三三
如くあり

外小出も病あり惣て此二小過事己小傳十三百
下小注カキ如し若て其二の病因ハハの災と成れり
を其小亦曰本末中塞位の住と立給ふ右の次小蒙屠乃味
坐云、須會乃倭謝云、奈訶乃味座云と有て筋骨
血肉等の病と本之災と云い痛疼痒癢の如きを末之
災と云い藏腑の病と中之災と云い氣血の不順あり
と塞災として其位數列り此即其病の消長と
定給へり次小保佐紀可太通志流可多阿都訶多登
登豆流伽多云、伊多太見可多云と有り此ハ諸病
の部門を次第とせ給へりあり是即此二柱神等療病

法を定めさせ給へり趣し其藥劑を用ふる事を
バ乃別味法度太囉依と云條有て右の語り本中未の災其末中本小就て各其方
有り次小波伽羅波立と云事有て其法度の中も略
有る事を示し給ひ次小阿治味味別歌致と云有て藥味の
甘苦小依て其功能の別を立給ひ此小就て師哪品本迦蒙
登云、計如氣物難須茂能云、谿氣本迺登云、慨氣本迺蒙云、
と云事有て其質の利く物有り其氣。利く物有る事
を明らふ爲とせ給へり是藥劑の法度あり其結小
ハ知須血脈地能差別和可知と云有る是即脈を以て病を診察
ふ方ありイキニ死活を知る方あり但右。乃別味法度太囉依

以下ハ武智字乃宿祿乃古登仁と有て二柱神の定め
させ給へり方ハ非り如くと雖も下二百九以下
小注す如く大己貴命イも人身の理を盡させ給
ひ以彦名命ハも疾病の本の窮めさせ給ひ又二柱
神共小採藥の事を成し給へり御事の御在し坐小就
ても己小神代小定めさせ給へり方小本武内宿祿命の事著り猶言と
加へ益し其術を明らふ爲らねりハ悉小二柱神の
遺方ある事ハ更し云ず外蕃諸國小傳ハり所の方
法と雖も皆此二柱神の方クニトコロ土小隨いて療法を立置せ
給へり者ありけねバ決めて其受る所有り者ありけ

り然して古の大同類聚方何れ久須乃里と云と
始として處乃利と有り上ハ此ある方字の訓と
も其如く訓來れるハ實ハ所以有る事ありけれ
但療病之方方字と佐麻と訓ハ本も有れ非あり
又古事記遠飛鳥宮段深知藥方と有るも右の久須
乃里合せて久須理能能理と訓べきあり記傳三十
九卷十下藥方ハ久須理能美知と訓べ方ハ和邪
と訓べし書紀神代卷小定其療病之方此方を佐
麻と訓べし然訓べくも非ず諸知藥方ハ藥を
用ひて病を治り術と知れ云ハ有て此の
方字をも合せて美知と訓れたれども此ハ其法則と
云ハ能理と云べ美○定ハ佐陀末多麻此と
知ハ云べ即醫藥ハ即通乃能里長生堂七年首は是也の方法を立給へり御事あり上ハ幾力
一心と有り係して此定字ハ甚く力有り事を知べ

然して定と立と意味の相通へり事ハ四神出生章第
十一一書立天邑君云ハ成務天皇一年御紀ハ國
郡立造長と有是あり又此第五一書ハ已而定其當
用と有此と立其當用と心得ハ違ハハ可一續
紀第三詔ハ不改常典立賜此敷賜留法と有を第
十四詔ハ不改常典等初賜此定賜部法隨と有て
立賜此と定賜とを通ハ用いられハ但委ハ云
時ハ立ハ物と起事あり定ハ物と決ハ事ハ
り此と一ハ爲べハ非ハ事の意と知ハ便有
ハ姑ハ云の然して立と云ハ定ハ方未
も事の貫ぬて轉易ハ改ハ

の意味有り。○鳥獸昆蟲之災異ハ大殿祭詞ハ此乃敷
言ありけり。坐大宮地底津磐根乃極美下津網根波府虫能禍無久
高天原波青雲乃雷詔久極美天乃血垂飛鳥乃禍無久大
被詞ハ昆蟲乃災高津神乃災高津鳥乃災會仆志靈物
爲罪許許太久乃罪出武道饗祭詞ハ根國底國與鹿備
踈備來物ハ相率相口會事無氏と有り此等の事共と
一ハ惣云あり彼大同類裏方味座乃倭訶知乃第七ハ
母能乃解者乃自故俚ハ太毛乃解多訶可味乃分と
有ハ是あり備此母能乃解と云ハ傳十二四下ハ注
如く邪神姦鬼ハ更あり鳥獸昆蟲の氣ハ瘁ハ疾病と

成り又ハ災異と成と云あり此三條百々中ハ万自故
俚ハ右ハ出せハ根國根國ハ踈び荒び來物ハ相交
こがれ此ハ目ハ見えぬ鬼物の人ハ託て其身と倒
一減ハと云あり天孫降臨章第一書ハ當遭害の
字と被用たると以其義を知べ一次ハ介太毛乃解
と云ハ實ハ鳥獸昆蟲等の害と云時ハ好ど也其一と
率ハ名目と爲ハ多訶可美乃介ハ古事記水垣宮
段ハ謂ハ神氣の類是あり故其高神の氣ハ祭祀
の法有り率ハ介ハ變置ハ事有り鳥獸昆蟲の氣
ハ厭避ハ法有りんて此と禁厭之法とハ云りんて此

小鳥攘鳥獸昆虫之災昆と有ハ石等の事共と合せ合て
書レ此レ者ハ己ハ私記ハ問ハ此等災異爲何哉答
也ハ書レ此レ一條大啓御説ハ鳥獸之災如鶯鴉鳴攘
獸及野狐狸魅蠱惑等類昆虫之災如蝗害苗及反鼻
眩蜂螫人等類也ハ宣ハへりハ鬼神ハ聞ハえたりハ儲石ハ万自
故狸ハ多詞可味乃分ハ鬼神ハ屬ハ俗ハ事ハけりハ此
弱ハ所ハよりハ鬼魅ハのハ祀ハ入ハて然ハ鳥獸昆虫ハ災異ハ
也ハ遇ハふ事ハありハけりハ云ハ以ハて行ハけハ其趣ハありハ皆ハ一ハ
りハけりハ平田氏ハのハ古今ハ妖魅ハ考ハ仙家ハのハ説ハ天狗ハのハ本
ハハ鷲ハ鳥ハ狐ハのハ數ハ百ハ歳ハをハ經ハたりハ鳥ハ前ハ翼ハよりハ手
をハ出ハすハ本ハよりハのハ兩ハ足ハ小ハ肉ハをハ生ハすハてハ立ハりハ獸ハ前ハ足ハ
翼ハとハ生ハすハ異ハ形ハふハ指ハ人ハのハ似ハたりハ形ハとハ成ハてハ立ハ行ハ
共ハ飛ハ行ハすハりハ中ハがハ翼ハ無ハくハ飛ハ行ハすハりハもハ有ハりハとハ云
りハ抱ハ朴ハ子ハ云ハ物ハ之ハ老ハ者ハ多ハ知ハ率ハ皆ハ深ハ藏ハ遠ハ處ハ故ハ人ハ之ハ有ハ見
之ハ耳ハ千ハ歳ハ之ハ鳥ハ万ハ歳ハ之ハ禽ハ皆ハ人ハ面ハ而ハ長ハ身ハ也ハ云ハとハ云ハれ
神道俗説問答ハとハ云ハ物ハもハ魔ハハハ狐ハ狸ハのハ類ハハハ老ハてハ變化
自在ハなりハとハ狂ハりハすハありハ天ハとハ翔ハ飛ハぶハありハあり

を天魔天狐と云ふ狼の五百年も八百年も生て一身
軽く飛行自在ハと天と翔ハりハと天狗と云ふ云々と云
るハ何れも怪しき説あり若其如くありと云ふハ然
る物共の事小迄係り此の文を見む事然り可
○鳥ハ和名枚羽族類小鳥文選注云羽族謂鳥也尔雅
集注云二足而羽者曰禽和名奥鳥一説飛曰鳥都了
走曰獸想謂之禽訓與と所見たり鳥の災異を成す事
ハ天孫降臨章天稚彦ハ復命カクシテなり一時乃遣無名天稚
雉伺之中略時天探女見而謂天稚彦曰音鳥來居杜杵天
稚彦乃取高皇產靈尊所賜天鹿兒弓天羽ニ矢射稚覽
之中略於是取矢還投下之其矢落下則中天稚彦之胸上
于時天稚彦新嘗休卧之時也中矢立死此世人所謂反

夫可畏之縁也。所見なる此時の雉ハ天神の御使と
爲て降りしめて災異を成す可き者ハ非ず。又天稚彦
ガ立死たりハ全く返矢の御罰のハ一有ければ尋當^常
の例トハ異あれども其鳥ハ斃れしり。天稚彦ガ身
小取てハ此ハ災異の類あるガ故ハ遷却崇神祠^詞ハ又
遣^志天若彦^毛返言不申^云高津鳥殃^依立處^云身
亡^支トハ有あり但此ハ傳^十二百^四ハ注^セルガ如ク
和名抄鬼魅類ハ日本紀云天探女^{和名阿萬一云}安萬
久ト出て此ハ鬼魅の女ト化て天稚彦小率^{乃佐}して不
忠を進めて終ハ滅亡ありたり。あねハ是ありむ石引

ハ大同類聚方ハ謂ゆる万^率自^率故^率俚^率の類ありけり。其
無名雉を以て事を成せりけり。鳥ハ災異の部あり
者あり此を以て此ハ鳥獸之災異ト云ハ表して裡ハ
ハ然リ邪神毒鬼の所爲ある事を知べきあり。又熱田
大神縁起ハ倭武尊還向尾張到篠城進食之間稻種公
謙從久米八腹策駿馬馳來啓曰稻種公入海亡没^{略度}
駿河海中有鳥鳴聲可^カ怜^カ毛羽音麗問之士俗稱^{覺賀鳥}
公謂曰捕^下此鳥獻我君^飛帆^追鳥風波暴起舟舩傾没公
亦入海矣^略ト有ハ邪神毒鬼の稻種公を亡ハひと爲
て鳥ト化て其聲可^カ怜^カト其形^{ウルト}音麗ト云見愛給ふ

可く物爲て洋中小全追ひ終小海底小て没る申一
ゝあど此も亦鳥の災異の一種ある者あり此後其景
行天皇四十年日本書紀東征の御時御紀小冬十月至上総國從海路渡淡
水門是時聞覺賀鳥之聲欲見其鳥形尋而出海中仍得
白蛤於是膳臣遠祖名磐鹿六鴈以蒲爲辛經白蛤爲膾
而進之故美六鴈臣之功而賜膳大伴部と所見らるハ
豫て稻種公の事を聞食一有らと御在一坐けら其
鳥を見認させ御在一坐むと尋出させ給へり小終
其大御被威小消れ奉りて海中小入て白蛤と化て果
小ハ膾小作れ奉り者あり此天壓神の武大御

勢あり此ハ實小惟神あり禁厭と申奉り可く御
有狀ありける此事平田翁の玉粹五卷中云此
り事有り推古天皇二十六年御紀小又此小似た
ふ事と河邊臣曰其雖雷神豈逆皇命耶多奈幣常遣人
夫令伐則大雨雷之後河邊臣案劍曰雷神無犯人夫常
傷我身而仰待之雖十餘霹靂不得犯河邊臣即化小魚
以挾樹枝即取魚焚之と見えたり然計の雷神と雖も
小魚と化れ取て焚り小魚と成て己小雷神の
威と振ふ可く雀海中小入て蛤と化り己小蛤
と成て小本の雀の心ハ有る非ず然れハ古の覺
賀鳥と白蛤と化り時ハ羽族より貝出小身を換る
あハ本の鳥あり故小膾小奉りたるあり皆
右の故事と高橋氏文小ハ大后の御事と即磐鹿
六獨命兼舩到于鳥許鳥驚飛於他神猶雖追行遂不得
捕於是磐鹿六獨命詛曰汝鳥戀其音欲見良飛遷他浦
不見其形自今以後不得登陸若大地下居必死以海中
爲住處云と有て堅魚と八尺白蛤とを得り料理て
奉りたる由云り此と以見り時ハ六獨命の詛ハれ

日本書紀傳二十九
〇二百二十三

海中入て蛤と成れるありけり此等予己小申
 臣壽詞講義注ハ就て見べし因云黒川春村と云
 人の語ハ和名欽ハ本草云海蛤一名魁蛤和名
 卒無木乃加比ハ百と失達説ハ濱栗と定め云々たれ
 ども甘み難し其ハ同欽ハ淫羊藿和名字無木奈と
 百ハ就て其葉を見ハ凡てハ濱栗ハ甚しハ似て
 也非ハ全ハ蛇貝ハ状ハたり其上濱栗ハ膾ハ作ハ物
 此海中小ハ蛇ハハ稀ハ一尺二尺許あるを今も見
 事ハあれバ卒無木ハ甘み切ハあり然見ハ時
 膾ハ作ハ事ハ何ハ疑ハふ所無ハくあり有ハけりハと云
 此ハ此ハ用無ハ事ハあハ其説ハ珍ハしハ就て
 又神功皇后元年御紀ハ且荷持田村有羽白熊
 驚者其為人强健亦身有翼能飛以高翔是以不從皇命
 每略盜人民と見えたり己小人代の事あり人あり
 翼百ハ空行く者有べしハ非ハ此ハ決ハめて怪鳥ハの又

皇極經世一書
 皇極經世一書
 皇極經世一書

を悩ハせたりありけり又皇極天皇三年御紀ハ三月
 休留ハ休留ハ産子於豊浦大臣大津宅倉と云事の百ハ
 果ハ其四年ハ蝦夷入鹿父子共ハ天誅ハ遇奉ハり
 休留ハ不祥ハありハ鳥ハありハ事ハ漢籍漢書ハ賈誼傳ハ云ハ
 和名ハ小鳩ハ張華博物志云鳩ハ鳥ハ休留ハ二字漢語人
 截手足ハ棄地則入其家拾取之ハ有ハ引ハて通證ハ蓋
 言響ハ也ハ之義其鳴聲似人語今俗所謂ハ久呂布也ハと云
 此ハ其父子共ハ天宗ハと滅ハしハ日位ハと頌奉ハり
 此ハ謀大逆ハ罪ありハ遁ハりハ事無ハく天誅ありハい
 其以前ハ然ハ不祥の鳥の災異ハはハ傳ハと見え

同枚小鳥説文鳥
 和名布衣（即ち）人衣
 色正赤云々
 世下本鳥也百と以
 其後驗有と事と知
 小本草和名云々
 鳥
 鳥（即ち）姑推一
 乳母鳥一名天帝女
 一名隱飛一名夜行
 女一名鬼鳥一名女鳥
 名（即ち）鳥
 俗小字天童云々

たかり又同枚小恠鴟漢語枚云與多加 晝伏夜行
 鳴以爲恠者也宋鏡の事有此此ハ鴟鴞の属して不祥鳥なり
 と云り又本草綱目此鳥出た姑獲鳥あども皆其一種
 ありと聞えたり此鳥儲右二百十小引り大殿祭詞小謂ゆ
 る天乃血垂を祝詞考ふ其事の恠ある由小云はたり
 ハ非あり此ハ上下津細根波府虫能禍無久と云有
 床より下の事を云い下小柱桁梁戸牖乃錯此動鳴事
 無久と有て此小ハ宅内の事を云はば天乃血垂飛鳥
 乃禍無久と云ハ決めて屋の上ありてハ叶ハどり所
 ありハ心著れて記傳十四四丁上略此ハ即被烟の騰り

處の名ゆ（即ち）云りありハ知陀理と訓べ飛鳥乃禍
 此血垂の處ハ屋と暮遣（即ち）て開たも故ハ虚空高
 く飛鳥ハ或ハ惡物ハ在れ何ハ在れ昨持來又ハ米異ハ
 小ハ在れ竈上ハ陸一ふど爲る事の有りを云ふ可
 一略下と云はたりハ然る物（即ち）猶烟出（即ち）して心行
 予が思ふハ血垂ハ芽垂（即ち）て芽を以て屋を暮下
 寸事ありけり此小下津細根云ハ天乃血垂云と有
 を承て下小引結幣（即ち）綱葛目能緩此取葺草乃噪無久
 と云對の文有を以知べ一六万葉十五三丁上小天尔有哉
 神樂良能小野尔チガマヤリカマヤリ葺草葺婆可尔と有が如く常小

也茅草チカヤと云ひ茅を如夜と訓ひ事ぬハ屋を菅覆
ふ草チヤハ此茅を云る者ありけり今昔を編小專此草と
以て物鳥りと考ふ可一頭宗天皇御紀室高御詞ハ
取菅草葉者此家長御富之餘也と有也草葉チヤと菅餘一
出す事を御富之餘也と宣へりぬハ其菅垂りたる
状を以てハ何ぞハ天乃血垂ると云ぬハ然れ
ハ此ハ鳥ぬどの屋を啄み噪り一破と事を飛鳥乃禍
とハ云ありけり此ハ大殿祭詞講義を著たり一問ハ
未此考の如くハ及バガリ一故小今
事の序ぬ云あり右の姑獲鳥ハ漢籍玄中記と云物小
産婦死後化作故胎前有西乳喜取人子養爲己子と云
い又乳母鳥とハ夜行遊々也也隱飛ぬも鬼鳥と云
物あり由本草綱目ハ出たり祝詞考中も其を引て此

鳥夜飛て屋又兒ハ衣小血を落セハ鬼一と云ひ又鬼
車鳥とて血を滴す鳥も有り云々と云ぬたぬども此
詞の文を能も説くれどハ説ありハ叶ハズ又和訓祭
小ハ天乃血垂の事を前漢五行志ハ倭人祿功臣倭天
雨血漢哀建平年山陽湖陵雨血三日と見え又漢惠帝
時晋惠帝時ハ有り通鑑ハ所見たれども此ハ似
て一も有り事共あり諸出雲風土記ハ島根郡法吉野
郡家正西一十四里二百廿步神魂命御子宇武加比比
賣命法吉鳥化而飛度靜坐此處故云法吉と見え神武
天皇戊午年御紀ハ見えたり頭ハ咫鳥ハ建角身命の
化給へりぬハ此等ハ別ハ故有り御○獸ハ上二百
事ぬハ右等の鳥の災異の例ハ非ズ○獸ハ上二百
小注せり如く官本小邪陀母能と訓せたり是正訓ふ
り和名枚毛群類小獸文選注云毛群曰獸也ハ雅注云
四足而毛謂之獸音待和名
因介毛乃有りて次あり畜を和名介
太毛乃と有ハ互ハ相誤れり由鈴屋大人の説と引て

傳十四

六十四丁百
三十四丁

小委一く注せりが如く若て獸の

災異を成せり一二と云はゞ神武天皇戊午年御紀ハ

天皇獨與皇子千研耳命帥軍而進至熊野荒坂津亦名丹敷

浦因誅丹敷戸畔者時神吐毒氣人物咸瘁由是皇軍不

能復振と有ハ神の毒氣を吐し瘁とせ奉りありは

即右二百十九丁小謂ゆる多訶可味乃介高小属神べし事あり

か此御時の事を古事記ハ改神倭伊波禮昆古命從

其地迴幸到熊野村之時大熊鬚鬚出入即失ハ神倭伊

波禮昆古命倏忽為遠延及御軍皆遠延而伏此時熊野

之高倉下齋一横刀到於天神御子之伏地而獻之時天

神御子即寤起詔長寢乎故受取其横刀之時其熊野山

之荒神皆為切仆尔其惑伏御軍悉寤起之と有り即

其序ハ化熊出凡天劍獲於高倉と有り是あり故此二

を合せて按ふハ其丹敷戸畔と云ハ荒神振の誅ハ奉

る事を恐れて此みハ大熊と化て毒氣を吐たりハ

りけり記傳十八四十七丁小此熊ハ尋常のハ非ず序ハ化

熊と有ハ如く荒振神の假ハ化りありと云はたり

が如く然れども其形を熊と化せば即熊みて天劍と

以て切仆る奉り時ハ其屍と共に滅びて荒振神の

威力ハ亡せて魂を留めて懼り奉り事ハ何も得為

ず成ふ一りハ即是獸の災異と云者ありけり己ハ云
 鳥の八尺白哈ハ化て膾ハ奉ハんハらハ多ハと一ハ事ハめハ斯
 り例猶多ハりハ儲ハ右ハの鬢ハ鬚ハの二ハ字ハと諸本共ハ誤ハれハり
 と伴ハ蒿ハ踏ハがハ閑ハ田ハ次ハ筆ハハハ熊ハ野ハのハ古ハ文ハ書ハハハ見ハ出ハらハり
 と鈴ハ木ハ系ハ譜ハハハ然ハ見ハえハらハりハ依ハてハ改ハめハ引ハりハ出ハ入ハの
 入ハ字ハハハ山ハ字ハと誤ハれハりハ出ハ山ハあハりハ其ハ序ハのハ出ハ入ハの
 のハ仇ハ字ハハハ山ハと誤ハれハりハあハりハのハ由ハ己ハハハ鈴ハ屋ハ大ハ人ハの
 説ハ有ハとハ思ハ景ハ行ハ天ハ皇ハ四ハ十ハ年ハ御ハ紀ハハハ則ハ日ハ本ハ武ハ尊ハ進ハ入ハ信
 合ハすハ可ハしハ景ハ行ハ天ハ皇ハ四ハ十ハ年ハ御ハ紀ハハハ則ハ日ハ本ハ武ハ尊ハ進ハ入ハ信
 濃ハ略ハ披ハ烟ハ凌ハ霧ハ遠ハ徑ハ大ハ山ハ既ハ建ハ于ハ岑ハ而ハ飢ハ之ハ食ハ於ハ山ハ中ハ山
 神將令ハ苦ハ王ハ以ハ化ハ白ハ鹿ハ立ハ於ハ王ハ前ハ王ハ異ハ之ハ以ハ一ハ箇ハ蒜ハ彈ハ白
 鹿ハ則ハ中ハ眼ハ而ハ殺ハ之ハ爰ハ王ハ忽ハ失ハ道ハ不ハ知ハ所ハ出ハ時ハ白ハ狗ハ自ハ來ハ有
 導ハ王ハ之ハ狀ハ隨ハ狗ハ而ハ行ハ之ハ得ハ出ハ美ハ濃ハ吉ハ備ハ武ハ彦ハ自ハ越ハ出ハ而ハ遇
 之ハ先ハ是ハ度ハ信ハ濃ハ坂ハ者ハ多ハ得ハ神ハ氣ハ以ハ瘡ハ卧ハ但ハ從ハ殺ハ白ハ鹿ハ之ハ後

△と古事記ハ足柄
 之坂本史の御事と
 爲り儲

△顯宗天皇前紀
 困事於人百困事
 して事延訓

踰ハ此ハ山ハ者ハ罽ハ蒜ハ塗ハ人ハ及ハ牛ハ馬ハ自ハ不ハ中ハ神ハ氣ハ也ハと見ハえハらハるハ
 此ハハハ蒜ハもハ嚼ハてハ塗ハりハ事ハハハ己ハハハ蒼ハ生ハ畜ハ産ハのハ禁ハ厭ハと成ハれ
 り者ハありハ儲ハ此ハ瘡ハ卧ハと和名ハ抄ハ小ハ日ハ本ハ紀ハ私ハ記ハ云ハ瘡ハ卧ハ和
 宇ハ江ハ不ハ世ハと有ハと名ハ義ハ抄ハ小ハ瘡ハのハ一ハ字ハと袁ハ延ハ而ハ世ハ理ハと
 利ハ瘡ハ音ハ莫ハ訓ハたハれハハハ宇ハハハ袁ハのハ通ハ音ハと右ハのハ神ハ武ハ天ハ皇ハ御ハ紀ハあり
 瘡ハ字ハと同ハトハ義ハありハ瘡ハ字ハ名ハ義ハ抄ハ小ハ宇ハ禮ハ布ハ又ハ夜ハ牟ハ又
 夜ハ夫ハ流ハ又ハ加ハ自ハ久ハと訓ハたハれハ也ハ其ハ哀ハ延ハ小ハ當ハりハ言ハ無ハと
 と其ハ結ハ小ハ天ハ皇ハ適ハ寢ハ忽ハ然ハ而ハ寤ハと有ハハハ醉ハりハ如ハくハあり
 と云ハふハりハ万ハ葉ハ十ハ四ハ百ハ四ハ丁ハ小ハ不ハ盡ハ能ハ祢ハ乃ハ伊ハ夜ハ等ハ保ハ奈
 我ハ伎ハ夜ハ麻ハ治ハ乎ハ毛ハ伊ハ母ハ我ハ理ハ登ハ倍ハ婆ハ氣ハハハ餘ハ波ハ受ハ吉ハ奴ハと

有る此を以て氣小醉と云事。有と知べしあり右の
謂ゆる神氣ハ彼毒氣と一少して謂ゆる多高神氣訶可味乃介
少て即阿志計乃毛能物と云は是あり傳十二百二小注
事共と考合す可し又同御紀ハ日本武尊略於是聞
近江騰吹山有荒神而解劍置於宮篁媛家而徒行之至
騰吹山山神化大蛇當道爰日本武尊不知主神化蛇之
謂是大蛇必荒神之使也既得殺主神其使者豈足求乎
云々有る此事と古事記ハ取伊服岐能山之神幸
行於是招茲山神者徒手直取而騰其山之時白猪逢于
山邊其大如牛尔爲言舉而詔是化白猪者其神之使者

雖今不殺還時將殺而騰坐於是零大氷雨打惑倭建命
此化白猪者非其神之使者當其神之正身因言舉見惑也云々見元たりを令せ
て思ふ其山神の大蛇も白猪も化て御心を惑
ハ奉りありあは此も彼名高神氣訶可味乃介あるを正身
を隠し然る蛇も猪も形を易て終小病疲し
奉りあり御紀續の下文ハ因跨蛇猶行時山神之興雲
零水峯霧谷腫而無復可行之路乃捷遑不知其所跋涉
然凌霧强行方僅得出猶失意如醉因居山下之泉側乃
飲其水而醒之故号其泉曰居醒泉也日本武尊於是始
有痛身と有る神氣小酔ハせ給へりあり上件ハ例共

△又下三百八十年
攝津風土記云昔有
大神云天津彥彥之
大神(伊弉諾)也此
神の類多事其所
注せりとも思ふ可
即古事記曰彼多阿
可味乃介(ニ)者

小同ト 其二十七年小日本武尊の熊襲と戦ふ御在
坐りし所小既而從海路遷徙到吉備以渡穴海
其處百惡神則殺之亦比至難波殺柏濟之惡神と有
共小水中あはれ蛇蝎の類あり然と有るは
出。屬あり其二十八年春二月乙丑朔日本武尊奏平
熊襲之狀曰臣賴天皇之神靈以兵一舉誅頓誅熊襲之
魁師者奉平其國是以西洲既證百姓無事唯吉備穴濟
神及難波柏濟神皆有害心以放毒氣令苦路人並爲
禍害之藪故悉殺其惡神並開水陸之徑天皇於是美日
本武尊之功而異愛と有り水陸の字を見小山神と
言向給いしあり古事記あり然而遷上之時山神河
神及穴戸神皆言向和而參上と有り其形を以て殺
れ奉り時ハ獸あじか化て又皇極天皇四年御紀ハ夏
諸人を惱ませたりあり
四月戊戌朔高麗學問僧等言同學鞍作得志以虎爲友
學取其術或使枯山變爲青山或使黃地變爲白水種
奇術不可殫究又虎授其針曰慎矣慎矣勿人知以此治

△其病と治り
ハ其病小似れども
猶災異ト是ト
有り此ト

之病無不愈果如所言治無不差得志恒以其針隱置柱
中於後虎折其柱取針逃去高麗國知得志欲歸之意與
毒殺之所見なり此ハ皇國人の彼國に留まらるが
然り妖術と學取と虎と友と爲らるるが谷川公羽の謂
ゆる大枝詞の謂ゆる畜仆 毒物爲罪の類ゆへ此ハ
彼物の罪の非に 東國の多き鉸細 西國の多き大神と一事ありけり
思ゆる物々然り虎の素より然り術の有る人小
移せりあり此も例の獸の災異を成せり類みて有
けり然り虎の奇術を傳へて暫くハ奇驗をせしめ
て其己の群と成して終小其行へり人と敬死せりあり

可事始後其與へたり針を奪去たりふして知べく又
 高麗人の歸りを諱て殺したり其法の漏れを惡く
 ての事と所見なり東國にては妖僧の密にクサツネ 狐と云
 を畜置て人の託して或は禍を成し又ハ病を發せしめ
 て其祈禱を託して落し財利を貪り西國のハ大神
 と云物を使ひて人を盡し事多しと聞
 けりハ皆獸の災異也大同類聚方ハ謂ゆる万自故
 狸と云ふ部是あり其通證ハ引きたる中原康昌記ハ
 應永廿七年室町殿醫師高天被禁
 獄三人也此間ハ狐之汝汰風聞也と有れハ昔也
 多し事多し今ハ江戸ありハ縉紳と云計ハ高
 多し事多し今ハ江戸ありハ縉紳と云計ハ高
 多し事多し今ハ江戸ありハ縉紳と云計ハ高
 多し事多し今ハ江戸ありハ縉紳と云計ハ高

和名抄に類か
 蟲を雅之有足謂之
 虫也上唐韻之出
 類通通用
 和名無三鱗介類
 名也古り備此昆

へて天下の行ふ政事ハ筋をも彼が聞て取扱く人も
 有る或人云り近頃天朝ハ天勅を奉る忠良の臣と
 浸し退け柔儀ハ奸吏柳の蔭ハ所を得たりと思へ
 諸虫の犬式朝野ハ横ハ行きて甚如此も危
 世中ハ猿樂を舞ハせて日ハの慰と爲居りも古ハ
 有る故狸ハ犬と猿との盡物ありと人ハ知
 りけり ○昆虫公私記ハ波布年之と有り古事記高
 津宮段ハ蠶の事と奴理能美之所養虫一度爲蠶虫一
 度爲蝨一度爲飛鳥と有り其飛鳥と云ハ對へし蠶虫
 とハ云り雄略天皇四年御紀大御歌ハ略陀略俱符羅尔
 阿武柯阿武柯都柯都柯曾能阿武阿武鳴鴨鳴鴨柯柯豆波野豆波野俱俱譬波賦武志
 謀謀飲飲哀哀枳枳弥弥你你磨磨都都羅羅符符儺儺我我柯柯陀陀播播於於柯柯武武姆姆岐岐豆豆斯
 麻野麻野麻登麻登と有り此ハ蛇又蜻蛉あり羽有り飛ぶ虫

あるを波賦武志と詠せ給へり。諸此を判記釋小昆
虫也。と注せり。又繼体天皇八年御紀小飛天之鳥と有
小對へて下伏地之虫と出たり。此伏字波布と訓せ
たり。大殿祭詞も下津細根波府虫乃禍無久と云て
次小天乃血垂飛鳥乃禍無久と對へ大祓詞も唯小
昆虫災と有り。記傳三十六卷四十八丁の石等の證
小蚊行唐韻之蚊音岐訓波布虫行也と有り。通證小説
文強蟲之惣名也。通作昆と有り。禮記祭統小昆蟲之異
草木之實と見え文選も昆蟲故其昆虫の災異を成
毒蓋とも有り。或注ひ引り。先古事記小大穴牟遲神の八
十神の爲小己の滅とれり。爲とせ給へり。一時の其

御祖命の趣けとせ御在り坐けり依て故隨詔命而
參到須儀之男命之御所者其女須世理昆賣出見爲目
合而相婚還入白其父言甚麗神來尔其大神出見而告
此者謂之葦原色許男即喚入而令寢其蛇室於是其妻
須勢理昆賣命以蛇礼授其夫云其蛇將咋以此礼
三舉打撥故如教者蛇自靜故平寢出之亦來日夜者入
吳公蜂室且授吳公蜂之礼教如先故平出之と所見
乃ハ傳廿三三百廿四四十七丁十丁注せり。如く此大己
貴命ハハ往り天下を作と給ひ國土の功を立と
せ給ふ可き大器の御在り坐り御事を預て見置せ給

へりーハ御父大神の御許めて生長ヒトナリ奉給り御
祖命と共に須賀宮の御在り坐り給へり果してハ
十神の御事有り此めて堪え給ふまじき為ハ御
父大神の御許り紀伊國の奉遣り給ひけり大神の
猶懲ナシずまの害の奉りて其成不ナシと試みさせ給ひて後
終り大任オホニミを許り給へり下の御心御在り坐りけりハ
蛇室と吳公與降室と入りて御在り坐り甚く辛苦
し給ふ御所為ハ渡りて給へり尋常の災異とハ
大い別あり物有り然り災異を成す可き惡蛇毒虫
を以て為りて給ふ非ずハ如何ハ害の給ハり此

時大己貴命も其后神も然り至深ニシ御心の御在り坐
り如何してハ知給ふ可き縦や知り食ひも其
遭奉り御身も取てハ甚く大い災異を受りて給へ
るハ有り故に其の禮を授奉りて給へ
り此の謂ゆる禁厭あり其災異を厭攘ふ所以
ある事申すも更あり此ハ己の蛇比禮有り又吳公與
降比禮之ハ吳公比禮と降比禮と別物あり詳あり
と雖も十種神寶の中ハ蛇比禮降比禮品物比禮と云
ふ合りけり猶二有りて吳公比禮や品物比禮ハ
當り可當りしと猶他の事とも兼り故に終り品物

と云ふハ成れるありむく〜然れハ此時の比禮ハ彼
十種神寶の中ハ傳りて其禁厭ハ鎮魂祭ハ遺れ
者ありけり比禮の事ハ下二百丁云べ〜又記傳十
丁ハ世人の害を成す者ハ種々多在中ハ此蛇具
公降の三虫を〜云々由ハ上代の民ハ家居あざ速
〜〜野山の交り住〜程ハ此等の物の害が常
多うけむ然れハ〜大被詞ハ昆虫ハ災を擧げ
十種神寶の中ハ此等を撥ハ比禮ハ有ありけれ
と有〜如く上代の民屋〜も今の如く天井も張
ず板敷も無く唯茅草の土間ハ甚假初あり〜狀ハ

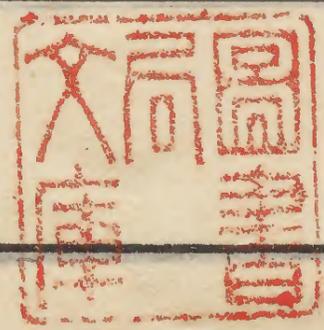
りけれバ殊昆昆虫の災異ハ多うけむ〜又欽明
天皇二年御紀ハ竊聞任那與新羅運葉席際現蜂蛇佐
亦衆所知且夫妖祥所以戒行災異所以悟人〜云事有
り通證ハ引れ〜左傳莊十四年ハ初内蛇與外蛇聞
於鄭南門中内蛇死六年厲公入公聞之問於申繻曰
猶有妖乎對曰人之所忌其氣發以取之妖由入興也
有〜似〜事あり又此の蛇具公降の災異ハ就〜思
出〜ハ蠱之爲毒多是閩廣深山之人於端午日以
蛇蛇蜈蚣蠍蟻三物同器貯之聽其互相啖候一物獨存
者則謂之蠱欲害其人密取其毒於酒食中啖之若欲知
其姓名以敗鼓皮燒灰米飲服方寸七須臾自呼蠱家姓
〜云事有り此ハ西蕃ハ多有り事〜聞〜ハ甚ハ淺
〜事〜有〜ハ有〜者ありけり斯り毒物ありカ
故ハ其災異も亦甚〜蛇ハ大蛇と雖も昆虫の属類不
り可〜知〜可〜蛇ハ大蛇と雖も昆虫の属類不
り然れバ上二百丁引り景行天皇御紀ハ所見ハ

彼膽吹山の山神（大蛇にて）日本武尊を惱まし奉りし猶昆毘
虫の災異と云者あり此小就て仁徳天皇五十五年御
紀小蝦夷叛之遣田道令擊則爲蝦夷所敗以死于伊弉
水門時而略中是後蝦夷亦襲之略人民因以掘田道
墓則有大蛇發頭目自墓出以咋蝦夷悉被蛇毒而多死
亡唯一二人得免耳故時人云田道雖既亡遂報離何死
人之無知耶と有ハ右の山神の如きハ非ず此主
征夷の將軍として下給ひしりハ賊勢の強き小敗り
せ給へり其神靈の大蛇と化て彼と塞し一僅
か一二人を遺して後來の誠と爲りたり者あり

天地の貫徹く忠心の凝固せし爲るハ右の山神
奸猾カクしき日を同しと云べし事あり
斯の時ハ其毒物の体を成りし其毒の全
瘁り事能はずあり假ハ大蛇の形ハ化て其
仇の報ハ此なり者ありと其六十七年御紀ハ是歳
於百備中國川鳴河汎有大虬令苦人時路人觸其處而
行必被其毒以多死亡於是笠臣祖縣守爲人勇捍而強
力臨汎洲以三全瓢投水曰汝屢吐毒令苦路人余殺汝
虬汝沈此瓢則余避之不能沈者仍斬汝身時水虬爲化
鹿以引入瓢瓢不沈即舉劍入水斬虬更求虬之賞黨類乃

諸此族滿洲底之岫穴悉斬之河水變血故号其水曰縣
守洲也と有も毒を吐て路人を令苦らハ謂ゆる昆虫
の災異あり事云も更あり然れば水族を御り方ハ
全瓢を水ハ投入り事其女を避く禁厭と所見たりハ其
其十一年御紀ハ茨田堤を令築給へり事を書きた
ハ小時天皇夢有神誨之曰武藏人強頸河内人茨田連
衫子二人以祭於河伯云々爰強頸泣悲之泣水而死乃
其堤成唯衫子取全瓢兩箇臨于難塞水乃取兩箇投
於水神請之曰河神崇之以吾爲幣是以今吾來也必欲
得我者沈此瓢不可浮令泛則吾知眞神親入水中若不
得沈者自知爲神何徒亡吾身於是飄風忽起引瓢没
水瓢轉浪上而下沈則瀟瀟沈以遠流是以衫子雖不死
而其堤且成也云々有る此事を習ひて吉備人の全
瓢を水ハ投たるハ有るハ必水族の者ハ瓢を
畏らるるハ故有る事ハ此能心懸子乃心荒也曾波水
る若くハ鎮火祭詞ハ此能心懸子乃心荒也曾波水

神乾垣山姫川菜子持氏鎮奉祀止事教悟給支と有る
此心懸子とハ火神と云あり心荒とい災災の事と云
ハ若然り事の御在し坐むハ水神ハ瓢と持し土神
ハ川菜と持して鎮奉祀とあり故右の文ハ有神誨之
曰と云ふ御夢ハ此瓢の言ハ沈此瓢不令泛則吾知眞神
ある可ハ此瓢の言ハ沈此瓢不令泛則吾知眞神
と云ふハ實ハ水神ハ坐さば世ハ瓢を用ひ初給ひ
神あるハ沈むも浮ぶも御心の任ハ爲さ
せ給ハ此を徴と爲て其御心と知て吾親水中ハ入
心其然らざハ偽神と知て吾身と亡ハト云ふハ
下ハ此瓢の妖を爲り事と知たハ故ハ此言ハ及
びたりハあり果して其眞神ありハ事と知て身と
沈むハありけり其勇有て雄ハ所爲ハ堅ハ
其後ハ然り事の絶たりけりハ自然ハ禁厭ハ法ハ叶
ハりハ又皇極天皇三年御紀ハ東國不盡河邊人大生
部多勸祭也於村里之人曰常世神也祭此神者致富與
壽平祝等遂詐託於神語曰祭常世神者貧人致富老人



還以由是加勸捨民家財寶陳酒陳茶六畜於路傍側而
 使呼曰新婦音入來都鄙之人取常世虫置於清座歌儻求
 福棄捨珍財都無所益損費極甚於是葛野秦造河勝惡
 民所惑打大生部也多其巫現等恐其勸祭時人便作歌
 曰禹都麻佐波柯神微騰母柯神微騰所聞來常世舉預能
 柯神微乎宇智岐多麻須母此虫者常生插樹或生於蔓椒
蔓椒此之其長四十餘其大如頭指許其色綠而有黑點
襲曾紀其貌全似養蠶之見元々此二百三十引之虎と
 使ひ一類之謂ゆり蠶物あり也其虫を假て妖邪
 と行ふ時ハ此も自然ハ昆虫ハ災異ハ一種あり事云

